

## 岡山県の旧制中学の校風—岡山一中と岡山二中を中心に—

渡辺 一弘

## 一 問題の所在

当時、市内の普通科は県立では朝日と操山だけでしたから、何かにつけて操山を意識し、比較したものでした。校風は、操山の軟派に対し朝日は硬派だと考えられていました。例えば、学級編成は（中略）成績別、男女別を原則として、進学中心の組み合わせだったようです。操山では男女混合学級が普通でしたから、感受性の高い年頃ですから男女交際の自由についてのコンプレックスを感じていた人も多かったようです<sup>1)</sup>。

中学を卒業したばかりの私にとっては、朝日高校の校風に改めて感激しました。朝日高校は他の高校に比べ宿題も少なく、勉強面に関してもかなり自由であったように思う。成績の悪い生徒を残し、補習をしたりすることもなかった。生徒一人一人の自覚にまかせ、大人として扱ってくれた気がしました。バイクで通学することや自動車免許を持つている人もかなりいました<sup>2)</sup>。

その頃、二中、一女という風潮がまだ完全には脱色されていなかったけれども、「操山高校」としての校風が順次でき上がりがつつあるとさだめたと思う。

大学合格率のみが高校のバロメーターとされていたとき、全員クラ

ブ活動強制入部、全校マラソン、クラス旅行、あるいは体育祭、文化祭など、学業以外の活動を通じ「人間」の育成に重点をおいた方針は、ライバル「朝日高校」の校風と対照的であった<sup>3)</sup>。

また操山高校は大規模校であるにかかわらず、『操山ファミリー』という、いつ誰が言い出したものか、学校の性格をこれほど端的にうまく扱えた表現はないと思う言葉がある。これを聞かされた時に、深い味わいと温かみを感じ、これが二中・一女から操山高に受けつがれている血液だと思っている<sup>3)</sup>。

これらの文章は、旧制中学・高等女学校の伝統をもつ岡山市内の二つの高校—岡山朝日高校（旧岡山一中、岡山二女の後身）、岡山操山高校（旧岡山二中、岡山一女の後身）の校友会誌、学校史から「校風」に関する記述を昭和三〇年代前半の卒業生、職員の間より引用したものである。これらを読むと、両校の間には明確な校風の違いのようなものが存在しているようである。また現在でもこのような違いは存在する、と両校の関係者は指摘している。両校の校風の違いは、既にそれぞれの前身の旧制中学においても際立っていたようである。例えば『日本人脈新地図・〈西日本編〉』の岡山県の項では、「一中と二中はあらゆる面で、きわだったコントラストを持っていた。一中は旧制高校生ばりに下駄ばき、弊衣破帽、冬にはコートをはひるがえして

街を歩いた。のびのび、そしてバンカラ。(中略)二中の校風は、いくらかきゅうくつなものようだった。一中の下駄ばきに対して、二中学生は外出するときも靴をはいた」との指摘がある。このような違いはどのように生じているのであろうか。このような校風の違いは、戦後も後身の新制高校に引き継がれている場合が多いと云われており、旧制中学の校風を問題にすることは、旧制中学の伝統を引き継いだ新制高校における学校文化の形成に果たした機能をみるうえで重要であり、戦後の地域における高校の評価、学校間格差の現状を検討する鍵になり、これらの点から本研究の意義が見出せる。

以上の問題関心の下、先の旧制中学の校風を検討するために、より広い概念である学校文化に着目して、筆者は一九九九年以来、中国国教育学会研究紀要において、岡山県を事例にして後発校の旧制中学の学校文化を岡山二中を通して、先発校岡山一中の学校文化との比較を『新教育社会学辞典』での「学校文化」の定義に従い、服装、学校行事、教育方針、上級学校進学状況等に沿って、学校史・卒業記念誌等を中心とした記述資料を用いて検討した。その結果、大正中期開校の岡山二中の学校文化が、明治初期開校の岡山一中に比べて学校の管理が厳しく、より質実剛健でスパルタ的な雰囲気強い反面、ガリベンでエリート的な岡山一中に対して大らかで、一大家族的な暖かい雰囲気をもつことを明らかにした。また両校がそれぞれ高等女学校と統合して新制高校になってからも、岡山一中のガリベンでエリート的な雰囲気と岡山二中の大らかで家族的な雰囲気が、それぞれの後身の高校において引き継がれていることを指摘した。本稿では、これまでの分析の補足と再分析を行ったまとめと、さらに他の岡山県下の旧制中学や他の地域の状況も踏まえながら、新たな資料を用いた分析と聞き取り調査も行い、後発旧制中学の岡山二中の学校文化を岡山一中の学校文化と比較検討することを目的とする。

なお本稿では、明治三二年の中学校令改正(第二次)以前に開校した旧制中学を「先発校」、それ以降に開校した旧制中学を「後発校」と定義し、さらに後発校の中で、大正八年の中学校令改正(第三次)以前に開校した旧制中学は「地域先発校」と定義する。これは、時期的に後発校として開校した場合でも、地域においては最初に開校した「二中」という名称が付けられている学校もいくつかあり、地域における先発校として存在している状況を考慮したためである。

## 二 事例研究の分析対象と分析方法、分析資料と聞き取り対象者

### (一) 分析対象

本稿では岡山一中と岡山二中を分析対象とした。岡山一中(正式名称は岡山県第一岡山中学校)は、一八七四(明治七)年六月に教員養成の目的で設立された温知学校に中学生養成所を併置したことが濫觴である。その後岡山中学校、岡山県尋常中学校、岡山県岡山中学校などと何度か改称して、岡山二中の設置に伴い、一九二一(大正一〇)年三月に岡山一中と改称した。中国地方では最初の公立中学である。戦後学制改革により、「岡山県立岡山第一高等学校」と校名改称し、一九四九(昭和二四)年八月「岡山県立岡山第二女子高等学校」(旧岡山一女)と高校再編成により両校統合され、岡山県立岡山朝日高等学校となる(岡山朝日高等学校同窓資料館 二〇〇〇)。

岡山二中(正式名称は岡山県第二岡山中学校)は、一九二一(大正一〇)年四月開校。初代校長には岡山県視学武居魁助が就任し、以後一九四五(昭和二〇)年三月まで二五年間もの長期にわたって校長を務めた。戦後学制改革により「岡山県立岡山第二高等学校」と校名改称し、一九四九(昭和二四)年八月「岡山県立岡山第一女子高等学校」(旧岡山一女)と高校再編成により両校統合され、岡山県立岡山操山

高等学校となる。

最初に示した回想当時、公立高校の岡山学区は岡山朝日高校と岡山操山高校の普通科二校による総合選抜制であった。その後、通学区変更や総合選抜制参加校の増加などの変化が生じたが、総合選抜制そのものは、平成一〇年三月の入試まで堅持されていた。そのため岡山朝日高校と岡山操山高校の入学者は、成績・通学距離が公平になるように配分されていた。両校は進学、クラブ活動等で競い合い、強い対抗関係にあった。

## (二) 分析方法

『新教育社会学辞典』での「学校文化」の定義では、学校文化とは学校集団の全成員あるいは、その一部によって学習され、共有され、伝達される文化の複合体で、①物質的要素（学校建築、衣服等）、②行動的要素（行事、生徒活動等）、③観念的要素（教育内容、教師ないし生徒集団の態度等）の三要素から構成されるという。石附（一九九二）は、近代日本の学校において「学校文化」とは、広義では学校というものの存在の仕方の全体で、狭義では学校やその教育のあり方を実際に規定し、表現するような側面なり要素であり、コト的な側面（校則、儀式等）とモノ的な側面（学校建築、校旗・校章等）があると指摘している。高橋（一九七八、一〇二一—一〇三頁）によると、旧制高校の教育精神を構成する三要素は、1、学校（校長）による教育方針、2、生徒全員を以て組織する校友会、3、生徒の全部もしくは相当部分を收容する寄宿舎、即ち寮、であるという。旧制段階における中学と高校への著しく低い進学状況と、公立中学においても早い時期から多くの学校に校友会が設置されていた状況から考えて、1と2は旧制中学の学校の文化を検討するうえでも重要であると思われる。また志水（一九九〇、三八頁）は、わが国の学校文化論の課題とし

て、今までの多くの研究が社会階層的な基盤と関係しえないところで論じられてきたことを指摘している。

そこで本稿ではこれらを基に、旧制中学の学校文化を「ある特定の学校の持つ、校風や伝統と呼ばれ、学校に規範化されているコト、学校を象徴化するモノ、そしてそれらに関する教師・生徒集団の意識・態度」と操作的に定義する。そして後発中学岡山二中の学校文化を、1、校訓（教育方針）、2、衣服（制服・制帽）、3、校友会活動、4、生徒の社会的背景、に沿って先発中学岡山一中の学校文化と以下に示した分析資料と両校関係者への聞き取りを通して比較検討する。

## (三) 分析資料と聞き取り対象者

学校関係の分析資料として検討したのは、以下のものである。

〈岡山一中関係〉岡山県立岡山朝日高等学校 一九八四、『回想による一一〇年史 鳥城』第一四〇号、一九九四 a、『想い出の一一〇年—尚志会・生徒会活動の記録—鳥城』第一五一号、一九九四 b、『岡山県立岡山朝日高等学校 写された一一〇年』各年度、『鳥城』岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料室 各年度、『岡山朝日高等学校 教育史資料』岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料館 一一〇〇、『岡山朝日高等学校沿革年表』。後神俊文 一九八八、『旧制中学・新制高校角帽制定事情』『岡山中事物起源覚書』一一—一二頁。國光久彦編 一九九五、『岡山一中 第六三回卒五十年記念鳥有会誌』。

〈岡山二中関係〉岡山県第二岡山中学校校友会 一九三三、『交友』第十号、一九四〇、『交友』第十七号。創立三十周年祝賀会 一九五〇、『創立三十年史』岡山県第二岡山中学校・岡山県立岡山第二高等学校。岡山県立岡山操山高等学校 一九六九、『創立七十年史』、一九七九、『創立八十周年記念 最近十年の歩み』、一九八九、『創立九十周年記念誌』、一九九九、『創立百年史』、各年度、『操山論叢』岡山県立岡山

操山高等学校。岡山県立岡山操山高等学校生徒会 各年度、『操山』。

「魁翁心語」編集委員会 一九九一、『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』岡山県立岡山操山高等学校同窓会「魁翁心語」刊行会

（\*一九五〇年刊行の『魁翁心語』と使い出の手記、その他を合わせて刊行されたもの）。岡山県第二岡山中学校第十九期会 一九八四、『岡

山県第二岡山中学校卒業四十周年記念誌』岡山二中二期同期会

一九九八、『五十年後の卒業アルバム—岡山二中二期卒業記念—』。

（その他の岡山県の学校関係）岡山県立津山高等学校 一九九五a、

『津山高校百年史 上巻』岡山県立津山高等学校 一九九五b、『津

山高校百年史 下巻』岡山県立高梁高等学校有終資料刊行会 一九

九二、『高梁中学校教育要覧』（昭和十一年一月「有終」創立四十周年

記念号より抜粋）『有終—高梁中学校—』米沢倉治編 一九七四、『お

もいでの記 おち葉 岡山県立高梁高等学校』。

聞き取り対象者は以下のとおりである。

（岡山一中関係）岡山朝日高等学校元教頭・岡山操山高等学校元教頭・

現岡山朝日高等学校嘱託同窓資料館担当（昭和二十七年卒、\*入学は岡

山一中、卒業は新制高校）、同校教務課教諭、合計二人。

（岡山二中関係）岡山操山高等学校元教頭（岡山二中、昭和二十二年卒）、

同校元同窓会係教諭（昭和五五年卒）、同校現同窓会係教諭（昭和三

〇年代後半卒）、合計三人。

聞き取りは平成一一年一〇月、一二年八月、同年十二月、一三年三

月の計四回、先の対象者等に対して複数回行った。聞き取り時間は一

人に対して一時間程で、五、六つの質問を行い記録メモをとった。録

音や録画は行わなかった。また岡山二中初代校長武居魁助氏の御子息

俊郎氏（元高梁高等学校校長、岡山一中、昭和一八年卒）と書簡を通

して二回質問を伺った。

### 三 分析結果と考察

#### 1 校訓（教育方針）

先ず学校に規範化されているコトとして学校の校訓（教育方針）をみる。表1は岡山一中と岡山二中（以下「一中」「二中」と略記）の校訓（教育方針）を比較したものである。一中の校訓は、開校後三〇年以上経った明治四二年の一月に第一〇代校長光岡金雄の寄贈による校旗の推戴式と同時に制定されたものである（岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料館 二〇〇〇、三頁）。なおこのとき生徒代表で誓辞を述べたのが、後の著名な物理学者である仁科芳雄である（岡山県立岡山朝日高等学校 一九九四、二二頁）。「質素」「剛毅」は戦前の旧制中学の校訓ではよく見られる言葉である。後の昭和九年一月二〇日の創立六〇周年の記念放送にて、当時の第一三代校長裏川寅蔵は、「中教育の根本精神として「自主独立の精神と刻苦勉勵の習慣」「明朗闊達な気風」「至誠奉公の熱意」を挙げているが、

表1 岡山一中と岡山二中の校訓（教育方針）の比較

|      | 校 訓 (教育方針)   |
|------|--|
| 岡山一中 | 「誠実を本とし信義を守るべし」「廉恥を尚び礼儀を重んずべし」「質素を旨とし勤労に服すべし」「剛毅の気象を養い独立の精神を振起すべし」 |
| 岡山二中 | 訓練に最も重きを置き、「真摯努力の習慣」「克己奮闘の習慣」「質実剛健の気風」「自律自重の精神」「愛校自治の精神」の実現を目指す    |

出典：『岡山県立岡山朝日高等学校 写された120年』、『岡山朝日高等学校沿革年表』、『創立三十年史』、『創立七十年史』、『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』より作成

の熱意」を挙げているが、

岡山朝日高校関係者は、ここで挙げた「自主独立」や「自主自立」「自主自律」等々が旧制中学から引き継がれた校訓と認識しているようである。例えば曾我は、「自主自律」が岡山中・一中時代から現在も生徒の精神的支柱になっていると指摘している<sup>④</sup>。また後神は、岡山中学校以来校訓碑に書かれるような校訓は存在しないのだが、校訓を「自主自律」と思っている者が多く、この言葉は教育方針として考えられたのではなく、先に実態があつて、それを短い言葉で置き換えるならば、自主自律とならざるをえなかつたのでは、と自分は理解している、と現在の岡山朝日高校の「自主自律」の源流について述べており、そのような自主自律の具体例として明治二〇年に制服・制帽を制定した岡山中学校の校友会「尚志会」の活動を挙げている<sup>⑤</sup>。なお筆者の学校関係者への聞き取りでも、リベラルで自主自律の伝統は朝日高校になつてからもかなり継承されたことである<sup>⑥</sup>。このような自主自律の伝統とともに、卒業生の回想では、一中はエリートのための教育機関であつたという記述が非常に多く、一中の学校の教育方針は、エリートを育てるものであり、世間も一中生をエリートとみなしていた、ということがわかる。例えば以下の回想がある。

〔略〕入学早々に裏川校長から、イートンスクールの例を引きながら、「諸君は選ばれた者の自覚を持って。学校は諸君を紳士として遇する」という意味の訓辞を受けて、さすが一中だと自尊心をを擦られた<sup>⑦</sup>。(T・D (昭和一〇年卒) 岡山朝日高等学校 一九八四、五九頁)

〔略〕当時の一中生は岡山市民から六高生とはまた違った意味でエリート扱いされていた<sup>⑧</sup>。(O・M (昭和一〇年四年修了) 同前 六一頁)

二中の場合も正式な形での校訓というものはないが、学校開校直後の大正一四年の落成式式辞にて、初代校長武居は「本校に於ては訓育に最も重きを置く考へであります」と述べ、「魁翁心語」編集委員会一九九一、一一三頁)、その時の内容を後にまとめて表1の五要素として、各学年に配当して訓練の重要目標としたという(岡山操山高等学校 一九六九、二〇七―二〇八頁)。武居は、外面的な知識教育ではなく内面的な心の教育に二中教育の独自性を求めていたと捉えられるだろう。この点については、二中は受験準備の予備校的性格ではなかつた<sup>⑨</sup>といった指摘からも伺える。二中が訓育を重視していたこと、そしてそれが新制高校に引き継がれていることについては以下のような卒業生の回想がある。

〔二中は(中略) 全人教育をねらつていたのでしよう。ただ二中の方が最近(\*筆者注、昭和四四年)云う道徳教育に熱心で大分かたかつたようです。(O・M (昭和五年卒) 同前 二八九頁)

「わが岡山二中は、大正九年創立されて以来、「全人教育」を目標として、学問、スポーツ、文化活動などに調和のとれた教育が実践されてきましたことは周知の事実であります」(M・H (昭和八年卒) 岡山県第二岡山中学校第十九期会 一九八四、二二頁)

〔二中が創設されて七十年になるが二中以来の伝統である「心の教育」が今なお脈々として操山の教育理念のなかに流れている(略)。(K・Y (昭和一三年卒) 岡山操山高等学校 一九八九、一四頁)

筆者の学校関係者への聞き取りでも、全人教育や人間性を高める心の教育の伝統は操山高校にかなり継承されているとのことである<sup>⑩</sup>。

表2 岡山一中と岡山二中の服装の比較（大正末から昭和初期）

|      | 制帽             | 制服（上着）                | 制服（ズボン）        |
|------|----------------|-----------------------|----------------|
| 岡山一中 | 角帽             | ゲートル有り、夏冬とも紺サージ、7つボタン | 前はポケット無し、後ろは有り |
| 岡山二中 | 角帽（白線をフチ取ったもの） | ゲートルなし、夏服は霜降り、5つボタン   | ポケット無し（当初）     |

出典：『創立七十年史』、『岡山朝日高等学校 教育史資料』より作成

以上学校に規範化されているコトとして学校の校訓（教育方針）を検討すると、一中は「自主自律」でリベラルなものでこれが新制高校にも引き継がれており、二中は訓育に重きを置いたもので、同様に新制高校に引き継がれているといえる。

## 2 衣服（制服・制帽）

次に学校を象徴化するモノとして衣服をみる。表2は一中と二中の服装を比較したものである。先ず注目したいのは、両校の制帽が角帽であるということである。当時中学での角帽は珍しく、また広辞苑によると角帽は多く大学生の制帽とするところから、大学生の俗称としても使われるという。つまり角帽は学校のプレステージの高さを示していたと考えられる。一中の角帽採用については、角帽すなわちスクエア・キャツプの「スクエア」あるいは「フェア・アンド・スクエア」に品行方正とか公明正大とかの意味があることから、そうした意味を寓せしめたのだと言い伝えられている。また注目する点としては、明治二〇年に制服とともに角帽を制定

したのが一中の校友会である「尚志会」であったということである。生徒は大学・大学予備門（東大の前身）にあやかって角帽を選んだという。一中の角帽については、七つボタンの制服と並んで以下のように憧れであり誇りであったという回想が多い。

「七つボタンの制服、角帽に桜の花柄で「中」の字を囲んだ帽章も他校の制服とは際立って違い、一中生の誇りを意識させるに役立つ」（T・D（昭和一〇年卒） 前掲 一九八四 五九頁）

「天下の三中の一ツだという誇りは角帽（我々の学年から戦闘帽になつて残念だったが）と共に生徒の心に自信と情熱を与え、また数多くの思いでと共に人としての情操をも蓄えさせてくれた」（F・T（昭和二〇年卒） 國光久彦編 一九九五、五一頁）

二中の角帽については、以下のようないくつかの経緯があるという。

「当初二中の初代校長武居は丸帽にしたい考えであったが、当時の父兄が「丸帽だったら子供を二中に入れない」というので、やむなく角帽にしたとのことである」

「昔から一中は中学では珍しい角帽であった。二中が出来る時、二中もやはり角帽にしたいということだったが、同じ角帽ではまぎらわしいというので、角帽に白線をフチ取ったものが採用されたのだと聞いている」（Y・K（昭和三年卒） 前掲 一九六九、二三五—二三六頁）

この角帽への憧れについては、二中においても一中と同様の回想が

ある。

「白線のある角帽はあこがれの的であった。入学が許可されると早速帽子を買って貰い、夜寝る時には枕もとにおいて寝た」(K・T(昭和六年卒) 創立三十周年祝賀会 一九五〇、五六頁)

「合格の発表を見たその晩、忙しい母を無理矢理に連れ出して、憧れの白線あざやかに光る角帽を買いに行く。(中略)光る帽子に輝く童顔、元気に登校した新入生の私は、何の思考も自制もなく、唯有頂天だった」(A・T(昭和一六年卒) 同前 六〇頁)

制服については一中は、七つボタンで丈の長いものである。角帽同様これも非常に珍しいもので明治三八年四月から昭和一四年入学生まで採用された。この七つボタンは先に示した回想から、角帽とセットで一中の象徴であったことがわかる。ゲートルは、大正の終わり頃に、兵科教練が厳しくなつて用いるようになった。また真冬でも外套はもちろん襟巻きも手袋も許可されず、ポケットに手をつっこむことも禁止だったという。冬の寒い時期に、生徒がズボンの後ろポケットに手を入れるのを、一中生の品位をおとす、という理由から教頭が朝の朝礼で小言を言うことがあったという。

一方二中の制服は五つボタンであるが、ズボンには当初ポケットがなかった。二中がズボンにポケットを作ることを禁じたのは、「手を入れて不善をなす」という配慮からしかなかったが、後に生徒の姿勢態度の点と特別のある理由で、右後に唯一ポケットを開けることに決まったことである。二中は規律がきびしく始終服装検査をされ、冬でもオーバー、手袋を禁止で、一中よりもつと厳しく、かなりスパルタ的に、質実剛健の校風を作ろうとしたことが伺える。

以上学校を象徴化するモノとして衣服を検討すると、一中は角帽、七つボタンといった当時の中学では非常に珍しい服装を採用し、他校との差異化を図るエリート的なものである。それに対して二中は開校当初から一中を意識したものであり、生徒に対して管理的であり、厳しいものであることが伺える。

### 3 校友会活動

次に学校内の活動、行事として校友会活動をみる。  
(校友会)

表3は一中と二中、並びに県下の他の旧制中学の校友会の比較をまとめたものである。金谷(一九六九)によると、旧制中学の校友会の成立事情は、①生徒主導型、②学校主導型、③運動諸部・学芸諸部の統合・統一調整型、の三つのタイプに分けられるという。この分類に従うと、一中は①の生徒主導型タイプ、二中は②の学校主導型タイプに当てはまる。一中の場合、全く生徒の力によって明治一九年に組織された。運営は生徒からなる役員・委員の協議で行われ、初期の活動として注目されるのは、先にも触れたが、明治二〇年の制服・制帽の制定である。明治二七年に生徒の言論活動に関して、雑誌『尚志会』が発行停止の処分を受けたため翌明治二八年から学校長の指導下に入ったが、初期の活動内容は、他校では見られない程自主的な活動を行っていた。

二中の場合、学校発足と同時に校友会創設の議がおこり、当時の全職員が起草委員となり、同年第一回総会を開催し、諸規定を可決した。武居校長は校友会誌創刊号に文をよせ、「我が校友会は、本校の職員生徒を以つて組織せる私的団体なりと雖も、その活動は、常に本校各般の施設教養の方針と策応し、本校教育の目的達成上、極めて重大なる意義を有す。」とした。二中の校友会は、正に学校主導型で学

表3 岡山一中、岡山二中、津山中、高梁中の校友会の比較

| 名称   | 成立年 | 成立事情  | 特徴                             | 雑誌   |                   |
|------|-----|-------|--------------------------------|--|-------------------|
| 岡山一中 | 尚志会 | 明治19年 | 生徒の側から自然発生的・任意な有志の団体から生じた      | 雑誌出版の他、運動会・演説及び討論会を開き、学校へ制服・制帽の規定の請願活動も行った。途中から(明治28年)、学校長の指導下に入った | 『尚志会雑誌』、後に『鳥城』と改題 |
| 岡山二中 | 校友会 | 大正10年 | 学校発足と同時に、成立過程は不明だが学校指導型と思われる   | 文化部と運動部の各部活動を置く  | 校友(*第二号までは『會誌』)   |
| 津山中  | 済美会 | 明治28年 | 学校発足と同時に成立、成立過程は不明だが学校指導型と思われる | 文芸部、運動部、庶務会計部から成り、運動部は生徒全員入部制と希望者の倶楽部があり、文芸部は雑誌・談話の二部になっていた        | 『済美会雑誌』、後に『鶴城』と改題 |
| 高梁中  | 有終会 | 明治28年 | 学校発足と同時に、学校指導型の官製の団体として成立      | 学術部、談話部、運動部、庶務会計部からなる  | 『有終』              |

出典:『岡山県の教育史』、『岡山朝日高等学校 教育史資料』、『創立七十年史』、『操山論叢』、『津山高専百年史 上巻』、『高梁中学校教育要覧』より作成

校の教育方針を支えるものとして存在したのである。校友会成立の型は学校によって異なるとはいえず、その目的が学校の校風樹立にある、とは先の金谷も指摘しているが、二中の場合校長自らが先頭に立って、校風樹立に努力したことが伺える。

なお参考までに、美作地区の津山中学と備中地区の高梁中学の校友会をみると、両校とも明治中期に校友会は成立しており、両校とも二中と同様に学校主導型であることがわかる。これから判断しても初期の二中の校友会組織は特徴的なものである、といえる。

以上学校内の活動、行事として校友会活動を検討すると、一中は校友会活動においても二中や他の先発校に比べて差異が見られる。二中は学校の管理体制がきつちりしており、一中よりも質実剛健的な雰囲気強く、津山中学のような藩校の伝統を持つ先発校と似た雰囲気をもっていたことがわかる。

#### 4 生徒の社会的背景

最後に生徒の社会的背景をみる。生徒がどのような社会的背景の下で入学しているのか、という状況を検討することは、学校における生徒の成功のチャンスに生徒の家庭の文化が如何に影響しているのか、という重要な問題である。

##### 〈生徒の社会的背景〉

表4-1、4-2は一中と二中の生徒の父兄職業別の人数と割合の比較である。一中は昭和一三年卒業生で、二中は昭和一四年時五年在学者で比較したものである。この時期は二中が開校してから二〇年が経とうとした頃で、二中の社会的評価もほぼ定まり、かつこの数年後の旧制中学進学者の増加期の直前にあたる。卒業年は二年ほど差があるが、資料の制約上ほぼ同時代とみなして検討する。なおこの職業別カテゴリーは、二中の資料に沿って作成したものである。一中の「公



表4-1 岡山一中と岡山二中の生徒の父兄職業別人数比較

|      | 農業 | 工業 | 商業 | 公務及<br>自由業 | 無業者 | その他 | 合計  |
|------|----|----|----|------------|-----|-----|-----|
| 岡山一中 | 13 | 7  | 34 | 56         | 49  | 31  | 190 |
| 岡山二中 | 38 | 28 | 30 | 75         | 27  | 6   | 204 |

表4-2 岡山一中と岡山二中の生徒の父兄職業別人数比較

|      | 農業    | 工業    | 商業    | 公務及<br>自由業 | 無業者   | その他   |
|------|-------|-------|-------|------------|-------|-------|
| 岡山一中 | 6.8%  | 3.7%  | 17.9% | 29.5%      | 25.8% | 16.3% |
| 岡山二中 | 18.6% | 13.7% | 14.7% | 36.8%      | 13.2% | 2.9%  |

\*岡山一中は昭和13年卒業生、岡山二中は昭和14年時5年在学者

出典：『岡山県立岡山朝日高等学校 写された120年』、「昭和14年度岡山県立第二岡山中学校一覽」より作成

務及自由業」は、官公吏、教員、医師、薬剤師、弁護士、軍人、宗教家をまとめたものである。  
 先ず一中の生徒の親の職業をみると、公務及自由業、無業者が多く、この二つで過半数を占める。それに対して、農業、工業、商業は三つ合わせても三割に満たない。ここで問題となるのは「無業者」が具体的にどういいう職業を指しているのか、ということである。この判断は難しいが、陸軍幼年学校採用者の出身家庭の職業を調べた広田

(一九九七、四三七—四三八頁)によると、「無職」(無業者)は「失業者」というよりも株式や債券等による金利生活者、土地・家の所有者、恩給生活者、退役軍人の家庭の可能性があるという。一中の卒業生のそのほとんどが上級学校へ進学す

ることから判断すると、この「無業者」の多くは広田の指摘しているように、金利生活者、土地・家の所有者等の可能性が高いと考えてい

「(寄宿舎生が帰省した後) 帰舎するときには部屋のものに土産を持って帰る。ある時、清水のさか飛びの思いでドロップスを買ってきたところ、こんなものをもってきたといって、他の部屋までふれまわってあざけりのたねにせられたことがある。生菓子ぐらいでないと口にあわないという息子たちが多かったのである」(D・T (昭和六年卒) 前掲 一九八四、四九一—五〇頁)

二中は公務及自由業、農業の順に多い。一中とほぼ同様に、公務及自由業と無業者の二つで半数を占めるが、農業、工業、商業の三つを合わせても半数近くを占める。一中と比べて農業、工業の割合は、それぞれ三倍程を占めるが、逆に無業者は一中の約1/2、その他は約1/5である。

以上生徒の社会的背景を検討すると、生徒の家庭の職業からみた社会階層は、一中に比べて二中の方が少し低く、農業従事者の子弟が二割近くを占めることが特徴であるといえる。なお参考まで入学者の学力レベルは、二中入学者の学力レベルは県下では一中に次ぐものであり、筆者の算出によると、卒業生の上級学校進学率も県下では一中に次ぐものであった(拙稿 一九九九、二二九—三三〇)。ただし入学者の学力レベルについては、筆者が別に行っている広島県呉市の旧呉一中と旧呉二中の学校文化に関する聞き取り調査において、学力的には一中に進学できても親同士の付き合いができないので、二中に進学

させたとか、小学校の教師が子供の学力とその子の家の経済力や雰囲気や格で志望中学を振り分けた、という証言もあり検討が必要である。

#### 四 まとめ

以上の分析結果から、後発の岡山二中の学校文化を先発の岡山一中と比較してまとめると以下のようになる。

岡山二中の学校文化は、岡山一中に比べて学校の管理が厳しく、かつ訓育に重きを置いたもので、その訓育重視の傾向は後身の新制高校にも引き継がれているものである。厳しいが全人教育的なものを志向している二中の学校文化は、開校時から二五年の長期にわたり校長を務めた武居魁助のパーソナリティに負う部分が大きく、先発校一中に對するにサバイバル戦略であると推察される。これは一中の自主自律的な傾向が強く、エリート的な学校文化とは対照的であるといえる。なお二中の「質実剛健で管理的な部分」と「訓育重視の大らかな部分」という矛盾する点は、今後検討する必要がある。

今後の課題としては以下の四点を挙げておく。先ず第一に、本稿では紙面の都合で旧制中学の学校文化の比較に終始し、後身の新制高校においてどれほど引き継がれているのか、という点についての考察が不十分であった。特に今回分析した岡山二中の後身の岡山操山高校は、戦前全国的に有名な名門の高等女学校である岡山一女の後身でもあり、学校史の記述でも昭和三〇年代前半の卒業生の回想では、一女からの伝統の強さを指摘するものもあり、報告者の聞き取りでも同様の話を聞いたので、高等女学校の影響力も踏まえて、新制高校への学校文化の継承について検討する必要がある。

第二に教員の問題がある。同じく今回の報告ではほとんど触れなかったが、二中の教員集団と開校以来二五年もの長期にわたり校長を

務めた武居校長に関しては、別に論じる必要があるだろう（\*教員集団については、一部だが拙稿（一九九九）で言及している）。

第三に時期の問題がある。岡山朝日高等学校嘱託同窓資料館の後神氏への聞き取りによると、岡山一中が自由でリベラルな雰囲気が強かった時期、ガリベンの雰囲気が強かった時期、その両方の雰囲気が有った時期と様々であるので、その点を考慮に入れるべきである。また二中初代校長武居の御子息俊郎氏によると、武居は昭和一〇年前後に大病を患い、子供を相次いで亡くし、禪の修行に打ち込み始めており、その時期の前と後で人生観がかなり変化しているとのことなので、時期に注意して検討する必要があるだろう。

第四に学校史や校友会誌の回想録のデータとそれ以外の記述のデータと聞き取り調査のデータを如何に併用するか、という問題がある。この点については方法論の検討と精緻化の必要があるだろう。

#### 註

(1) K・K（昭和三四年卒）一九八四、「教卓とスキヤキ」『回想に

よる一〇〇年史 鳥城』第一四〇号 岡山県立岡山朝日高等学校 一三四頁。

(2) O・H（昭和五四年卒）一九九四a、「生徒会活動を通して」

『想い出の二二〇年—尚志会・生徒会活動の記録—鳥城』第一五一号 岡山県立岡山朝日高等学校 一一〇頁。

(3) H・H（昭和三三年卒）一九六九、『創立七十年史』岡山県立岡山操山高等学校 六一九頁。

(4) T・K（前校長、昭和一八年岡山二中卒）一九八九、『創立九十周年記念誌』岡山県立岡山操山高等学校 二七頁。

(5) サンデー毎日編集部編 一九七四、『日本人脈新地図・西日本

編』泰流社 八三一―八五頁。

(6) 日本教育社会学会編 一九八六、『新教育社会学会辞典』東洋館出版社 一一七―一一八頁。

(7) 拙稿 一九九九、『戦前期における中等学校文化に関する研究―岡山県を事例にして―』『教育学研究紀要』第四五巻 第一部 中国四国教育学会編 二二六―二三二頁、二〇〇〇、『戦前期における中等学校文化に関する研究―岡山県を事例にして(Ⅱ)―』『教育学研究紀要』第四六巻 第一部 中国四国教育学会編 一六三―一六八頁。

(8) 昭和二五年四月より岡山県下の高校は学区制、総合制、共学制の三原則が貫かれるようになり、普通科でも実施された。当初普通科では、岡山区、吉備学区、勝英学区の三学区であったが、昭和二八年に改正され、岡山区の二校のみとなった。その後、昭和三八年度から岡山区には普通科の岡山大安寺高校が誕生して三校に、昭和四九年には岡山芳泉高校が、昭和五五年からは岡山一宮高校が加わり、五校で総合選抜を実施した。この方式は、平成一一年三月の中学区と単独選抜の実施まで続いた。また昭和四〇年代に盛んだった岡山市周辺の市町村の岡山市への合併に伴って、学区もわずかずつ変化していった。

(9) 操山高校と朝日高校の総合競技定期戦(操朝戦)が昭和二九年から始まり、その後対抗戦参加校を五校まで増やして、平成一〇年まで続けられた。

(10) 戦前期、小学校卒業者数に対する中学と高校への進学者数の割合は、一九二五(大正一四)年でそれぞれ四・五%と〇・三%、一九三〇(昭和五)年でそれぞれ四・一%と〇・三%である(尾崎 一九九九、一〇六頁の表より算出)。

(11) 公立中学校の校友会の設置率は、明治三二年で六八・六%に達

しているという(渡辺 一九七八、一八一―一九頁)。また戦前の中等学校は、すべてといっても過言ではない程校友会組織を有していたという(金谷達夫 一九六九、「中学校における校友会の意義とその成立過程」『操山論叢』第四号 岡山県立岡山操山高等学校 九頁)。

(12) 仁科芳雄は明治四三年岡山県立岡山中学卒業で、昭和二四年の創立記念日に「我等の行く手」という演題で講演をしている(いまはじめる自分さがしの旅 岡山朝日高)平成二二年度パンフ)。

(13) 岡山県第一岡山中 一九三四、「岡山一中六十年の回顧」『鳥城文苑』一四頁。

(14) 曾我英二 二〇〇〇、二二二五今から未来へ―岡山朝日高校創立一二五周年記念美術展―『鳥城』第一五七号 岡山県立岡山朝日高等学校 二八頁。

(15) 後神俊文 一九九九、「『自律律』の源流」同書 第一五六号 岡山県立岡山朝日高等学校二八―三一頁。

(16) 平成二二年八月二五日、朝日高校教諭河合保生氏への聞き取りによると、その理由の一つとして、戦後朝日高校の教員の約 $\frac{1}{3}$ が一中の卒業生であったからだという。なお現在も同校の教員の約 $\frac{1}{5}$ は、朝日高校の卒業生であるという。

(17) 岡山操山高等学校 一九六九、二五九頁。

(18) 平成一一年一〇月九日、操山高校教諭貝畑信行氏への聞き取りによる。

(19) 後神によると、戦前角帽が目立つ中学は福岡県の豊津中学と岡山県の岡山中学(後の岡山一中)であったという(後神俊文 一九八八、一二頁)、また岐阜県尋常中学、鳥取県尋常中学、香川県尋常中学でも一時期角帽を採用したが長くは続かなかったという(同前 一九九九、前掲論文、二九頁)。なお豊津中学の学校

史にも角帽が憧れの的であったという記述が見られる(福岡県豊津中学校 一九三七、一二〇頁)。

(20) 同前 一九八八、一二頁。

(21) 同右 一九九九、前掲論文 二九頁。

(22) 「天下の三中」とは、当時上級学校進学率の高かった東京一中、神戸一中、岡山一中を指すという(岡山県立岡山朝日高等学校

一九九四a、三〇頁)。

(23) 後神俊文 一九八八、前掲書 一三頁。

(24) 太宰施門(明治四〇年卒) 前掲書 一九八四、二五頁、岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料室一九八〇・九、『岡山朝日高等学

校 教育史資料』第八集 二三頁。

(25) K・S(大正八〜二二年在職) 同前 一九八四、三六頁。

(26) M・Y(昭和四年卒) 同右 四四頁。

(27) O・M(昭和一〇年四年修了) 同右 六二頁。

(28) Y・K(昭和三年卒) 前掲書 一九六九、二二六頁。

(29) A・M(旧職員) 前掲書 一九五〇、四〇頁。

(30) M・A(昭和四年卒) 同前 一九六九、二三八頁。

(31) O・M(昭和五年卒) 同右 二八九頁。

(32) 金谷達夫 一九六九、前掲論文。

(33) 後神俊文 一九九九、前掲書。

(34) 前掲 一九六九、二二八頁。

(35) 前掲論文 一九六九、一五頁。

(36) ちなみに二中の昭和一四年時一年在学の生徒のデータをみると、農業は二三・二%と増加し、公務及自由業は三〇・一%、無業者

は七・三%と減少しており、旧制中学入学者の家庭がより大衆化したことは明らかである(昭和十四年度岡山県第二岡山中学校

一覽)より作成)。

(37) 平成二二年五月二三日、M・M(呉二中、昭和一五年卒)への聞き取り、平成一三年九月四日、T・M(呉一中、昭和一九年卒)への聞き取りより。

(38) 岡山一女は、大正末期から昭和初期にかけて、東京女子高等師範学校(現、お茶の水女子大学)への進学者が全国一を誇ったという(吉本俊二 一九九四、『一目でわかる学校系列と教育業地 図』日本実業出版社 一四五頁)。

(39) T・S(昭和三二年卒) 前掲書 一九六九、六一八頁。

(40) 平成二二年八月二五日、同校教諭藤井正氏への聞き取りより。

藤井氏によると、操山高校の初期の頃は、二中よりも岡山一女の勢力、雰囲気が比較的強かったという。

(41) 平成二二年八月二五日、同年二二月二六日の聞き取りより。

(42) 平成二二年一〇月二〇日の書簡より。

分析資料以外の参考文献・資料

(1) 福岡県豊津中学校 一九三七、『豊津中学校史』。

(2) 広田照幸 一九九七、『陸軍将校の教育社会史…立身出世と天皇制』世織書房。

(3) 石附実編 一九九二、『近代日本の学校文化誌』思文閣出版。

(4) 尾崎ムゲン 一九九九、『日本の教育改革』中公新書。

(5) 志水宏吉 一九九〇、『学校文化論のパス・ペクティブ』長尾彰夫・池田寛編『学校文化 ―深層へのパス・ペクティブ』東信堂。

(6) 高橋左門 一九七八、『旧制高等学校研究 寮歌・校風論篇』昭和出版。

(7) 塚野克己 一九九八、『長崎の青春 旧制中学校・高等女学校の

生活誌』長崎文献社。

(8) 渡辺融 一九七八、『明治期の中学校におけるスポーツ活動』『体育学紀要』第一二二号 東京大学教養学部体育研究室 一一二頁。